

知られざる版本：ジッドのルイス宛書簡集（完）

吉井，亮雄
九州大学文学部

<https://hdl.handle.net/2324/19376>

出版情報：(37), pp.21-27, 1994-07-26. 青山社
バージョン：
権利関係：

知られざる 版本 (完)

——ジツドのルイス宛書簡集——

「君の無沙汰」という表現にもかかわらず、実際にはヌーシャタル滞在中、ルイスとの手紙のやりとりは頻繁だったようで、ジツド自身も三日後にはふたたび筆をとっている。二人の友情関係にかんする記述が大半を占めるこの長い手紙は、両者の相違にたいするジツドの認識と、むしろこの相違こそが貴重なのだと主張して友情を維持しようとする彼の配慮をつたえて興味ぶかい。

★書簡7（一八九四年十月八日、ヌーシャタル）

冒頭の呼びかけは前便と同じく「かけがえのない君」。これにつづいて、「ぼくにはピエール・ルイスの作品とはどんなものであるか、またぼくの友人「ルイス」自身がどんな存在であるかが分かりますか、はじめている」と述べて、その具体的な内容がおおむね以下のように語られる——かつてぼくたちはお互いをひどく手荒にあつかっていた。そこには高慢と激情、そしてとりわけ友情があった

吉井亮雄

とはいえ、相手が自分と違っていることの価値を認めず、本能的に自分の描くイメージどおりに相手をつくりあげようとしていたのだ。だが今となつては、君がそういった互いのやりとりをとても巧みに導いてくれたのだとぼくには思われる。つまり、ふたりの相違は、敵対することなく円滑に育まれたので、もはや悔むべきことなどではなく、むしろ互いの個性を伸ばしあう建設的なものであると思われるのだ。こういうふうに見えるのは、ぼく自身の信念が弱くなったためではない。ぼくの熱情にはかわりがない、ただ前より賢明さを増したのだ。そして、ぼくは君との友情に魅了されるだけではない、ぼくは君との友情に常ならぬ知的保証を見いだしているのだ。数年後、ぼくたちは文学においてかなり異なった道をたどっているかもしれないが、たとえ違つていようがいまいが、ふたりが手をつなぎ、同じ方向にさし出そうとしさえすれば、大きな力を発揮するだろう。だから、ぼくに手紙

をくれたまえ。断言してもよいが、今や興味津々の文通ができるだろう……。

さらに追伸として、ライプニッツを読みふけている旨。また、「偉大な享楽主義者のだれもがそうであるように、君には、君が愛を語るのと同じように上手く死を語ることができるだろうと思う。だが、君のとるべき最良の方法は、結果によってではなく原因によって愛を描き、逆に死のほうは、原因によってではなく結果によって描くべきだ」など、と。

この手紙から十日ほどのち(十月十七日)、ジッドはヌーシヤテルから、すでに冬ごもりのための下見をしていた近郊の小村、人口わずか八百のラ・ブレヴィーヌに転じる。そして、ミラン前掲書によればその翌日(ドレー前掲書では翌々日)、彼との再会をのぞむルイスに宛てて、今こそまさに自分の「知的価値のすべてを決定することになる時期」だから、孤独と仕事に徹したいと決意を表明し、そのかわり「冬も半ばになり、『パリュード』の校正刷を直し」たり、他のいくつかの計画を仕上げたときには、どこでもルイスののぞむ場所、大いに語りあかそうと書きおくる。これにたいしルイスは、滞在中のルーアンから、不満をもらしながら「会わないほうがいいだろう」と同意をつたえる(二十日付返信)。こういったやりとりにつづくのが、以下の書簡である。

★書簡8(一八九四年十一月五日、ラ・ブレヴィーヌ)

「おぼろげな用事で今週はずっと忙殺された。君に手紙を書きたいと思いつながら、書けなかった」と謝罪のあと、「それにしても、パリュードの計画」について書いてよこせとはどういうことなんだい、このぞっとする本はほとんど終わりにかけているというのに。とはいえ、今週は一行も書けなかったんだが」。

つづいて「君の『アリアーヌ』を受けとった。見事な冊子だ。バイイが出版したもののなかでも最も見事なものに入る」と本の体裁を褒めたあと、「とくに感心するのは、ぼくが『ヴァランタン・クノックス』の表紙にと取っておき、そしてバイイもだれにも見せないとぼくに約束していた紙を使うという、エロルドと君との厚かましきだ」と、軽い皮肉。また、作品の銘句として『プロセルピナ』の一文「日はかならず落ちるが、夜はけっして閉じぬ」が使われていないのは残念だ、なぜなら、ぼくの気に入った文ならどれでもいいが、『アリアーヌ』の一文を今度は『プロセルピナ』の銘句として引くならば愉快だっただろうから、など。そして最後に「ぼくの無沙汰を責めないでくれたまえ。君を喜ばせるために大いに仕事をしなければならぬのだ」。

書簡中、ジッドの『ヴァランタン・クノックス』とは、計画段階にとどまり、結局は未完に終わった作品、またバイイは、ラール・アンデパンダン書店(すでに言及、『ピリチスの歌』初版の版元もここ)

の経営者で、一八九〇年から九三年まで知的無政府主義と哲学・秘教を主傾向とする雑誌「政治・文学論集」を編集・出版していたエドモン・バイイのことが、ここではそういった細部についての注釈はおいて、ルイスとの関係に焦点をしばって話をすすめよう。

ルイスがジッドにながしかの精神的な支えを求めようとしていたことは想像にかたくない。ルイス研究者がほぼ一様に指摘するよう、この時期、盲腸炎など健康上の不安をはじめとして、経済的な困窮や、それに起因するジョゼ・マリア・ド・エレイアの末娘マリーとの恋愛の破局¹⁾など、彼を失意の底に沈ませる要素にことかかなかったからだ。いっぽう、会いたいという友人の希望を創作上の必要から断わったことそれじたいはともかく、以後、「パリュエー」の完成稿を最初に見せるかという問題をめぐり、ヴァレリーをあいだにおいてジッドがとりつづけた綱渡りともいえる態度には、やはりどこかルイスにたいする不実な印象をぬぐいきれないのである。この間の事情を、なんらかのかたちですでに活字化された書簡の記述をつきあわせることで述べておこう。

まずはヴァレリーとのやりとり——ジッドは、ルイスに書簡⁸を書いたのと同じころ、ヴァレリーにも手紙を送っていた。この手紙じたいは保存されていないため、そこにいたる経緯や記載内容の詳細は不明だが、十一日ふたたび同者に宛てられた手紙の表現をかつまり強力であることを感じとりたいという欲望²⁾にかられて書か

れた、かなり厳しい調子の「起訴状」だった。また後の事実経過から判断すると、そこにはすでに『パリュエー』の原稿を委ねる旨も記されていたようだ。これにたいしヴァレリーは、ジッドが「期待したとおりの見事な」手紙（消印では八日の発信）を返す。自身の「行為の根本動機」を説明した、この長い心情吐露の末尾にはつぎのようにある——「君はぼくが何を見ているのか知っているのだろうか。そしてぼくらの関係は？ ぼくは見、かつ感じる。ぼくらが愛しあっている。ただ、ぼくらは二人とも互いに相手を最も震撼させるものを見せているのだ。君は一種の〈天国〉を——そしてぼくは確認した〈地獄〉を。ああ、スイスなど放りだせ！ そしてこちらへ来たまえ」すでに触れたように、十一日の朝これを読んだジッド³⁾はただちに、これまた長い返事を送り、「この最も辛い手紙にたいする返答として、君は最良の書簡を書いてくれた。この二通はぼくらにとって重要なものとなるだろう」と感謝しているのである。

いっぽうルイスのほうからは、なんとも皮肉なことに同じ十一日、書簡⁸への返信がとどく。ルイスのこの手紙は本稿の第二回掲載分でも言及したのだが、そのなかで彼は、ジッドからの報告にたいして「いったいどういうわけで『パリュエー』は終わってしまったのだ」と皮肉を込めて切り返ししながら、いずれにしても原稿は自分に送れと強く要求してきたのだ。ヴァレリーに返事を出したばかりのジッドは、やはりその日のうちに、つぎのような返事を送ってルイスのいらだちをなだめようとする——「ヴァレリーにその奇妙な手

紙を書いたのは、彼から「見事な」手紙を引き出すためだった。それは上手いきき、ぼくはすでに返事を出してしまつた。だが心配しないでもいい、へまはやっていない、ただ妥協をしたまでだ。ぼくは彼に『パリュード』を委ねると申しでたんだが、この申し出を取り消すとなれば不作法ということになってしまう。だが、ヴァレリーがぞつとするだろうからこそ、ぼくは興味本位でこの申し出をしたのだ。だから原稿は君のために取つてあるることになる。校正刷を直すときには「芸術作品にたいする君のかくも繊細な感賞」を頼りにすることになるのだし。これはオテル・ドゥルオの競売目録（一九七七年十二月十九日）に引用された一節だが、目録が要約するところによれば、同じ手紙でジツドは、『パリュード』の刊本はラル・アンデパンダン書店から出版されるが、それに先立ち第一章が「白色評論」に掲載されることも知らせている。

ルイスの強い要求にいくぶんかは応えようとしたのだろう、数日後ジツドはこの第一章を、「白色評論」に直接送るのではなく、まずルイスに送つて、彼に同誌との仲介を委ねている。しかし、本当の信頼はもっぱらヴァレリーにおかれることになる。ジツドはルイスに第一章を送ると同時に、単行出版のため、また「三分の一しか完成していないのに、原稿を印刷に回すという無鉄砲」をしていたのだが、以後のラル・アンデパンダン書店との交渉はいうにおよばず、「白色評論」とのそれにかんしてさえも途中からはヴァレリーを頼るなど、この友人に全幅の信頼をよせるのだ。しかも、あ

きらかにルイスのことを念頭において、原稿が「君とバイイとぼく以外の者の手に渡らないように」「乞極秘」「内緒、内緒に願います」と、二度にわたつて要請しているのである。

すでに述べたように『パリュード』の脱稿は十二月五日。それまでの執筆経過から逆算すれば、実質的な仕上げに要したのはわずか数週間ということになるわけだが、作品完成をさかんにルイスとの関係は、予想外の事態も災いして急速に危ういものになっていく。四日後、完全稿を受けとつたヴァレリーが、ジツドの制止をきかず、みずからこれに目を通したばかりか、あろうことか、その後まもなくルイスにこれを渡してしまつたのである（ちなみに、ヴァレリーは『パリュード』をあまり高く評価していなかったらうと推測されている。作品をウージェーヌ・ルアールに献じようというジツドの意志も、あるいはすでにこのとき知らされていたのかもしれない。原稿を最初に託されるのは自分以外にはありえないと確信していたルイスのほうはおさまらない。そして彼の心は、裏切られたという憤慨と、作品にたいする正当な評価とのあいだをばげしく揺れうごく。まず十六日付の書簡で、じつはまだ原稿を読んではいけないのに『パリュード』はすばらしく見事だ」と褒めたたえ、「ヴァレリーがそれを読まなかったことが唯一の救いだ」（ヴァレリーはそうルイスに言った！）と述べたうえで、「ぼく以外、他のだれにも『パリュード』は読ませたくない。再読したら、それを一枚いちまい焼き捨てる」、「親友ユベールは『パリュード』を焼きはしなかった、それが少なくともぼ

くが彼とは違う点だ」と通告する。しかし、その三時間後、原稿を読みおえた彼は、ふたたび筆をとり、先便執筆の事情を説明したうえで、作品を「こいつはずごい」と高く評価するのだ。だが、けっしてそれで終わったわけではなかった。四日後（二十日）には、「ぼくは昨日、ぼくにたいする君の愛情が不確かで、あいまいで、真に利己的であることを感じ」、もはや「君の友情をあてにすることはできないと悟った」、そうであるかぎりは「二人の関係は終わったものと、以後考えてもええとありがたい」と書きおくり、土曜日（二十二日）にエロルド宅で会い、互いにやりとりした手紙や文書すべて返却しあおうと挑発的な提案をしているのである——「君の書いたものは一枚たりとも漏らさない、だから君のほうでも誠実さをもって同じようにしてもらいたい」。

この一件にかんして、両者のあいだで実際に真剣な話し合いがもたれたかどうかは定かでないが、ルイス自筆の書簡（計二八六通）がその後も長くジッドの手元に残ったこと、一九二五年に競売に付されるまではルイスからの献呈本二十点が保持されたこと（『流域』三三号掲載の拙稿「蔵書を売るジッド」を参照されたい）などから判断して、互いの手稿類を返却しあおうという事態には至らなかつたことだけは確かだろう。だがそれでも二人の危うい関係が、その後いくたびか試みられる和解の努力にもかかわらず、もはや修復可能な域を大きくこえてしまったという印象はぬぐいがたい。書簡八通の紹介を主眼とする本稿の使命はとうに終わったという気もするが、筆をおく

にあたり参考までに、以後はほぼ決定的な絶縁にいたるまでの二、三の山場を挙げておこう。

ジッドは十二月中旬にはパリにもどっていたが、首都の窒息的状況にはすぐに嫌気がさし、早くも下旬にはモンペリエに向かい、さらに年が明けて一八九五年の一月下旬、念願の「あの美しいオアシス」に帰っていく。そして、アルジェやビスクラを再訪する前に、ブリダールで偶然オスカー・ワイルドとアルフレッド・ダグラス卿に出会い、前者の強い影響のもとに、もはやはっきりと自身の同性愛的傾向を確認する。これはジッドの生涯に決定的な刻印をのこす事件となるのだが、ルイスのほうはワイルドの性向を容認することができず、この見解の対立が根底にあって、同年三月、ヴァレリーの仲介のもとスペインからの帰路アルジェに立ち寄った彼との和解の試みは早々と失敗に終わる。ついで約二か月後、ジッドの母の死去をめぐる一件——。これは、一九七三年に「ジッド友の会会報」が印刷公表したルイス宛書簡によってあきらかになつた事実だ。母を喪つたジッドに、ルイスはただちに愛情に満ちた手紙を送つたが、これにたいしジッドは六月三日付の返信で、八年ごしの友情に実質的な終止符を打つ。その長い手紙の冒頭と末尾——

「いや、ピエール、もはや取り返しのつかない過去に立ちもどることはよそう。もうぼくに会おうとはしないように。人生の途上でぼくらがまた出会うばあいには、そして、それはかなり頻繁に

起きることだろうが——なぜなら、ぼくらは二人とも高貴なことを心から愛しているのだから——、ぼくらがふたび出会うときには、君が手を差し伸べるならば、ぼくは君の手を握るだろうし、こちらから手を差し伸べるならば、ぼくは君の手を握るだろうし、互いに理解しえないことを人目にさらすのは無用でもあり遺憾でもあるのだから——、だがしかし、もうぼくら二人の友情については口にしないように……。〔中略〕

もう夜も更けた。水曜の夜以来、極度の不安とそれに伴う悲痛が、すっかり睡眠を奪ってしまった。君の手紙はたった今、ラ・ロックから転送されてきた——そこで、その前に睡眠薬を飲みすっかり酔ったようになり、まるで夢うつつて書いているような感じだが、つぎのことを伝えるためにすぐ返事を出したいと思った。母の埋葬が明日火曜日の正午におこなわれるが、そこにはけっして来てくれないように、君の繊細な気もちと尊敬とをあてにしている。

さらば。冷たく君の手を握る。

アンドレ・ジツド

この二通の手紙について、ぼくは、だれにも語るまい。

周知のようにこの一年後、編集方針に不満をいだけジツドが、ルイスとともに同人に名を連ねていた「ル・サントール」を脱退するという事件をきっかけに、彼ら二人の決裂は少なからぬ同時代人の

知るところとなる。だが、ひとつの喪に刻印され、痛ましくも冷やかな絶縁通告がそれに先行して密かに発せられていたことを思えば、この公的な決着はむしろ遅すぎるほどであった。



ジツドがルイスについて語った回想の多くは、おりにふれて言及したとおり。これにたいし、ルイスのほうは後々まで固く口を閉ざして、輝かしく始まり、騒々しい曲折を経て苦く終わったこの友情について、ほとんどなにも語るものがなかった。

〔付記〕

「ここに紹介する書簡八通はいずれも今まで存在が未確認だったもの」という旨を本稿第一回掲載分で記したが、不覚にもそれが不正確であることに後になって気がついた。書簡5と6にかんしては、断片的ながらそのテキストが、手稿類専門業者として名高いシャラヴェー書店の販売目録(第七三六号、一九七〇年三月)にすでに載っていたのである(ただし、日付や正確な発信地は明記されず)。

ひたすら不明を恥じるばかりであるが、この点について大方のご海容を乞う。ちなみに同目録では、上記の二通をはじめ、「ミュンヘン、パリ、ローマ、ビスクラ、ジュネーヴ、ヌーシャテル」から発

信された計十二通が一括で売りに出ている。これから見て、書簡集を構成する他の六通もそこに含まれていた可能性が高い。

なお、『一粒の麦もし死なずば』ならびに『ジッドロヴァレリー 往復書簡集』からの引用にあたっては、それぞれ堀口大學訳（新潮文庫、一九六九年）、二宮正之訳（筑摩書房、一九八六年。最後に引用したルイス宛ジッド書簡もここに訳出されている）を参照のうえ随時拝借したが、そのばあいも表記上の統一のため、しばしば改変をほどこした。

註

(1) 彼女をめぐるルイスがレニエと競い敗れるも、後にやはりエレディアの次女ルイーザをめぐって、かつての恋敵と義兄弟になった話は有名だが、それも含め、エレディアの娘たちが当時の文学者たちと結んだ、奔放で入り組んだ婚姻・恋愛関係については、最近邦訳の出たドミニク・ボナ『黒い瞳のエロス——ベル・エポックの三姉妹』（筑摩書房）が委細を語って興味ぶかい。

前田 総助

贅言閑語

今秋刊行

(2) 封筒にはジッド自身の筆跡で「十日」という記述があるが、これはおそらく受信の消印による後のメモ。

(3) ただしヴァレリー本人にたいしても、「ゲラになってから修正するところがたくさんある」ので、「このおそろしい草稿を読もうとはしないように」と要請している。

(4) ただしクライヴ前掲書は、ワイルドの逮捕・裁判はこの後である、したがって二人が彼の性向を問題にした可能性はうすいと述べて、同性愛にたいする見解の相違が和解不成立の主原因であるとする解釈に疑念を呈している。

(5) ただし、その後もルイスが数度にわたりジッドに自著を贈ったことが知られている。またジッドのほうからの献本にかんしても、最近『ピエール・ルイスに。あがらいたく (Irresistiblement)』と記された『地の糧』初版の存在が確認された（ボン・ヌフ書店販売目録、第九四号、一九九一年）。しかしながら、ジッドの両義的な献辞が象徴的に示しているように、これらの存在をもってただちに友情の存続を言い立てることはつつしむべきであろう。

所詮人間とは、他者と相交わるところに態をなす何かではないのか。あえて〈私事〉を語り、己が有り様を探らんとする千字エッセー第二弾。「断じて正気たるべし」「鎮遠俘虜収容所」「珊瑚のマリア」「複製文化」他百篇。

版社山青